
二人の悠 宇宙編

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の悠 宇宙編

【ZPDF】

Z0959B

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

いつも俺の後ろに憑いている幽霊『悠菜』は誰にでも見える幽霊だった。

(前書き)

同じ設定、同じ登場人物の企画小説「グループ小説」第七弾です！
「グループ小説」で検索すると、他の先生方の作品も読むことが出来ます。

「先生！… 息子は助かるんでしょうか！…？」

天井が移動している…。『』は…。

「おい！… 輸血用の血液と移植の心臓の準備は出来てるか？」

慌しい。一体なにが起きてるんだ。

なんだ…。突然意識が…。

* * * * *

街を歩くとみんなが俺を見る。当然と言えば当然だが…。

みんなが俺を見る理由はちゃんと分かってる。

それは、俺の後ろでうらちよらしているやつかいな浮遊靈『
悠菜』がいるからだ。

なにがやつかいかと言つと、この悠菜とか言つ幽靈、なぜか他の
人にも見えるのだ。そう万人、世界共通、誰にでも見える幽靈。な
ぜこいつは誰にでも見えるのだろう。いやそれ以前になんで俺に憑
いてるんだろう。

見える幽靈悠菜は、見られるのを言い『』にまるでスターの『』と

く手を振つてやがる。」こつは生前立たがり屋だつたんだろ？
言い換えれば「元氣で明るい子なんだろうが、もうすでに死んで幽靈
となつてゐる。元氣も何もない。

『ねえ～悠一郎、相変わらずゆうつて人氣者だね』

「ねうだね。よかつたね」

「うちは迷惑してくるつてこいつが軽いとこつかなんとこつ
か。

「の悠菜といつ幽靈は、なぜか俺の後ろにずっと憑いている。朝
から晩まで、これじやあストーカー幽靈じやないか。夜中起きたと、
横に立つているものだから驚いて思わず声をあげそつとなるとさが
ある。

「なあ、悠菜はなんで俺に憑いてくるんだ？」

『えー？ ゆうも知らないよ。なんで知んないけど離れられない
んだよ。離れることが出来るならとつくに離れてるよ。ゆうにはや
らなきやいけなこことが残つてるんだからさ』

「やうなきやいけなこじ？ つまつこの世に未練があるつてこ
か？』

『あるよ。一いつ……あー、悠一郎、協力してよー。』

「ん？」

『ゆうには未練がある。だから成仏できない。でもその未練を成し

遂げたら成仏できるかもしれない。そしたら悠一郎の後ろに憑いて
なくてもいいし

「なんか、お前の言い方だと、迷惑しているのは俺から離れられな
い自分がって言つてるみたいだな?」

『え? ゆうだよ。なにがうれしくて悠一郎と一緒にいなきゃいけ
ないの? ゆうにはどうしても会いたい人がいるのに』

「それは、こっちの台詞だよ。なにがうれしくて……ってお前、会
いたい人がいるのか? それが未練か?」

『やうだよ。ゆうはね。病氣で死んじやつたの。脳死だた。でも、
生きてる時とつてもやさしくしてくれる人がいて、ゆうはその人の
ことが好きになつたの。でも想いを伝える前にゆうは死んじやつて
だから……』

後ろで一人いつも明るい悠菜がこのときまとも悲しそうな表情
を見せた。俺はその顔を見て決めた。

「わかつたよ。そいつに会わせてやるよ

『え? ほんと?』

「ああ、それでお前が消えるんなら喜んで探してやる」

そう言つと悠菜はすく嬉しそうな表情で飛び跳ねた。つて元か
ら浮いてるんだけど。

「それで、なにか手がかりは?」

『えっとね。名前はジェルエル・エールス』

「え？ 日本人じゃないの？」

『日本人だよ』

「でもジェルエルなんちゃらって言つて……」

『外人名だつたら日本人じゃないってどういう神経？ 偏見よ、へんくけん！』

悠菜は、目を細めて腕を組みながら言つてくれる、確かに俺が悪かつたかも知れないが死んでるやつに言わるとムカツクのは何故だろ？

「そ、それでそいつは死ににこるんだ？」

『案内してやるから、さっさとつけ！』

こいつ、俺の弱みを握つたかの？とく急に偉そうになりやがつた。人の使い方を知つてやがる。もしかして生前こいつは人の上に立つことをやっていたのか。目立ちたがり屋だし。

とりあえず俺は、仕方なく悠菜に言われるがままそいつのいるという場所に向かつた。電車に乗つて移動している間もこいつは手を振つている。のん気なもんだな。

悠菜に言われた場所までやつてきた。電車なのに意外と時間がかかつてしまつた。こんな遠くに住んでいるのか。そいつは。

しづら歩いていいると、悠菜が俺を金縛りにしてとめた。金縛りをこんな風につかうなよ。つと悠菜が止めたといふやうな、養護施設だった。

「え？ 悠菜……！」

『セーに立つてこしてくれただナドいこよ

悠菜のその言葉に俺は戸惑った。なかに入らない氣か。ここからなにをするつもつなんだろ？

「でも、おまえ中にはこりなきやそこにつく会えないぞ

『ゆうはもう死んでる人間だから……、やつぱり会えない

「な、なに言つてんだ！－！－！」まで来て！

『もつこまさら気持ちを伝えたつてすぐこいなくなつかけやつこ……

「そんなこと言つたらずつと俺の後ろに憑いたままでやつれより気持ちも伝えられずに成仏なんか出来るわけないだろ！しつかり云えり－！－ それで満足できるのか！？

俺は、なに言つてんだ。ガラにもない。こんなことを言つたのは初めてだ。

『じつしたの？ 悠一郎

俺は、悠菜を無視して歩みを進めようとしたが悠菜の金縛りで進

むことができない。

「おーい！ 金縛りをとけー 進めないだろー。」

『駄目よ、解いたら悠一郎が施設に入つて行つかけつけじやん

「あたりまえだーー こままでいいわけがないだろー。」

俺は、必死に金縛りにあつてゐる身体を動かそうとした。だが悠菜の金縛りは相当強く動くことができない。

「ぐつ！ 動け！ 身体……、動け！ー」

その言葉とともに身体に縛られていた鎖がちぎれたように身体が言つことを聞くよになつた。俺はそのまま悠菜に振り返らず施設の中に入つて行く。悠菜も強制的に俺の後ろから憑いてくる。

「おーいーー この中に悠菜を知つてゐやついるかーー。」

俺は力を込めて腹の底から叫んだ。この施設全体にいきわたるくらい大きな声で。

「ちょっとあなた、施設内では静かにしてください」

一階から現れたその人はハーフのよつな人だつた。どうやらこの施設で働いている男の人ようだ。俺はこの人に聞いてみることにした。

「あんた、悠菜つて女、知つてゐるか？」

「え？ 悠菜……、あなた悠菜ちゃんを知ってるんですか？ でも残念ですが、彼女は……」

俺は、その男の田線を合わせてから首を横に向けた。その男の田線をそちらにやるためにだ。そつ悠菜のほつ」。

「え……悠……菜ちゃん？」

悠菜は観念したかのよつにゆつくつ近づいてきた。

俺は不思議だつた。いつもは明るく能天氣な悠菜が「これほどに大人しいんだから、きっと悠菜が好きなのはこの人だろ」。

「「」んにちわ、ジル」

「悠菜ちゃん、なんで？ だつて君は」

「たぶん、「」の世に未練があつたから、ゆつはまだ伝えなきやいけない」」

俺は、緊張していた。勢いでここまできてしまつたが、これは……もしや、愛の告白つてやつか。俺は関係ないのに妙に緊張してしまつ。

「駄目だよ、悠菜ちゃん」

「え？」

「君の気持ちには気が付いていた。でも君はもう死んだんだ」

俺は、悠菜の顔を見た。とても悲しそうな悠菜の顔を。

「ちゅうと待てよーーー！」

俺は何を言つてゐんだ。

「それはないだろ？ こいつは、悠菜はあんたに会つたためにこいつまで来たんだぞ！！ 死んでもあんたのことを想い続けてきたんだ！ 幽靈になつてもあんたのことを本氣で想つてるんだーーー！」

俺は、なんでこいつなことを言つたのだらつ。言つた後に冷静になつて考えれば不思議なことだ。悠菜に対しても親近感でもわいたかな。

「いいよ。悠一郎、わかってるから。ゆうせそれを言つてこられたんじやない」

「え？」

「ジヨル、ゆうは確かにあなたのことが好きだつた。生きてた時、足に障害を持つていてずっと車椅子生活だつたゆうにこつも笑顔で接してくれてすゞこ嬉しかつた。だから言つに来たの」

「悠菜？」

俺は悠菜が言つたことが分かつた気がする。はじめから呂白する気なんてなかつたんだ。

「ジヨル、ありがと」

悠菜は、俺が言わなくてもちろんと分かつていた。悠菜は普段、めちゃくちゃな奴だけど、こいつも生きていたんだ。そして、人生があつていろんな人と関わって、こいつの生きてた証はちゃんと記憶に残つていてそれを分かつてくれる人がいる。足に障害を持つて早くに死んじゃつたけど、きっとこいつの人生は幸せだつたんだろう。

顔を見れば分かる。

だつてこんなに素敵な笑顔でいるんだから。

俺達はジエルに別れを告げ施設の近くの川原にやつてきていた。もうすぐ沈みそうな夕焼けが綺麗だ。

『悠一郎もありがとね。ゆうのわがままに付き合つてくれて』

「へつ！ 俺はこれでお前が消えてくれるのが嬉しいんだよ。早く消えろ！」

照れくさかつた。人にこんなに感謝されるのは初めてだったから。死んでる奴だけど。

つてあれ。確か……。

「悠菜、お前確か未練は一つあるつていつてなかつたか？」

『うん、そうだよ』

「一つはさつきのだろ？ もう一つは？」

俺は、とんでもない思い違いをしていた。

『ゆうれ。脳死で死んだんだよ。それでも、なんか死んだ後に手術されちやつてゆうの身体から盗られたんだよ』

なぜ悠菜が俺から離れることが出来ないのか。なぜ俺が悠菜の気持ちを考えることが出来たのか。

俺は、あの日大事故に会った。その事故で俺は心臓に大打撃を受け心臓移植をしなくては死んでいたらしい。

『ゆうの心臓がさ、悠一郎の胸の中にあるんだよね』

俺は、勘違いをしていた。こいつは、悠菜はあくまで人間ではなく幽霊、未練がある限り成仏は出来ない。

『返してくれ~。ゆうの心臓』

俺は、夕日が見える川原で、悠菜によつて心臓を抜き取られた。

心臓を失くした俺はその場で息絶えた。

川原からみえていた夕日は沈み空しく俺の人生の終焉を告げた。

END

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

ジャンルはその他ですが、結果はホラーで終わりました。こういつのもありですよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0959b/>

二人の悠 宇宙編

2010年12月29日08時05分発行